

石田芳弘

聞き手◎西村幸夫(東京大学教授)

編集協力◎埜正浩(町並み塾実行委員会)



石田芳弘(いしだ・よしひろ)さん
 1945年愛知県犬山市生まれ。前犬山市長、元愛知県県議会議員、中央教育審議会臨時委員などを務める。著書に、「君も市長になれ」(全国書籍出版、2003年)、「今こそローカリズム」(風媒社、2006年)など。

「犬山城下町 都市再生の視座」

●犬山でのまちづくりのきっかけ

—今日は、石田芳弘前犬山市長です。

石田さんは犬山市のご出身で、大学卒業後は家業の酒屋を継ぎ、また、衆議院議員の秘書も経験されました。その後、県議会議員の3期12年を経て、1995年に犬山市長に就任し、3期11年半務められました。その間、犬山市の歴史を活かしたまちづくりを大きく進められました。

もう一つ全国的にも有名なことは、犬山の教育改革をされたことです。30人学級を実現するなど、改革派市長としても有名です。

犬山は12年間で町の景観も、お客さんの流れも、市役所の中の雰囲気も大きく変わりました。それを当時の石田市長がされたわけですが、どうしてそういうことが出来たのかについてお話がうかがいたいと思います。

石田●ご紹介いただいた石田芳弘です。私は西村先生と出会い、お話をうかがって、自分の仕事を組み立ててきました。ですから、私も西村塾の塾生の一人だと自認しています。そんな私ですから、立派なことを言うつもりはありません。一つの地方

自治体の挑戦として話を聞いてください。

今日の話のテーマは「都市再生の視座」です。特に犬山の城下町をどのように再生していったかということについて、あくまでも一自治体の市長というスタンスからお話したいと思います。

それぞれの町のいわゆる伝統とか、古きよきものを守っていくため、効率や財政論だけで考えたら、それらを守る根拠が全くなくなってしまいます。古いものを守っていくことは伝統という普遍的な価値観を守ることです。古い町の美しい町並みを守ることと効率を優先することは、次元が違うという理念を持たないと、どんどん流れ去ってしまう時代だと思っています。

●愛無不立(愛なくば立たず)

私が市長になろうと思ったモチベーションは、やはりふるさとに対する愛情です。論語の言葉に「信無不立(信なくば立たず)」とあり、まちづくりはまさに「愛無不立(愛なくば立たず)」です。「この町が好き

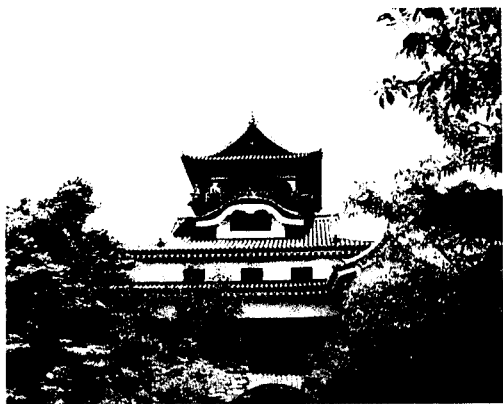
国宝犬山城を有する城下町。中心市街地の空洞化という悩みを持っていたまちが、一人の政治家によって再生された。彼は住民や専門家の意見を聴いてまちづくりの哲学を持った。それは、歴史軸をもとに、街なかの都市計画道路を廃止し、歩けるまちに再生しようというものだった。今、まちには人の流れが生まれ、賑わいが戻ってきた。

だ」と言っている人がいないと町はもたないのです。そんな人によって支えられないと、伝統というのは砂上の楼閣のように崩れていってしまふ気がいたします。実は私もそうなのです。自分の町が好きで好きでしようがないのです。誇りで誇りでしようがないのです。

●犬山城下町

私の町には、犬山城という国宝があります。国宝のお城は松本城、犬山城、彦根城、姫路城と四つありますが、その中で戦国時代から残って

国宝 犬山城



いる山城は犬山城だけです。北原白秋は犬山城を「木曾川の白いかぶ」と形容しましたが、戦国時代の国取り物語の名残がまだ残っている国宝です。

現在の都市の骨格図と城下町絵図を重ねるとびたりと合います。要するに、道路を拡幅していない城下町なのです。都市計画を行政が実行しなかった。実は、あまり勤勉ではなかったのが、幸いしたのです。

●都市計画道路の拡幅問題

犬山には、今はフランス料理屋になつていますが、奥村邸という登録文化財第1号の建物があります。この主人が頑固一徹な人で、町並み運動のリーダーになり、町並みを考える会というのをつくりました。実は、この人が私の支持者だったので。一方、当時の市長が道路拡幅派で、それが選挙の争点になりました。

私は城下町の中に生まれ、家業は酒屋で、登録文化財のような家で育ちました。中心市街地が空洞化しシッター通りになってきて、これはなんとかしなければいけないと思

市長選挙に立候補し、私が勝ちました。

市長就任後、「全国町並みゼミ」を犬山に誘致しました。選挙をやりますと怨念が残っていますから、「おれは選挙に勝ったぞ。世論もバツクだから、こうやるぞ」とストリートに言ったらだめです。頭をひねって仕組んだのは、この町並みゼミを利用して、「犬山は拡幅するべきではない」という決議をしてもらいました。

その道路は都市計画の決定がありました。5mを16mに拡幅する計画です。ところどころ、家を建て替える人は補償金をもらってセットバックしていますから、そういう人たちは「行政は方向転換して何だ」と怒るのです。私が市長になった12年前は、愛知県も「都市計画を覆すとは氣違い沙汰だ。話にならない」という反応だったのです。建設省も最初は拒絶反応でした。

ところが、それから世の中が変わってきたのです。公共事業を抑制していくという方向になり、道路拡幅の予算がないという状況になってき

た。また、少子高齢化の影響が徐々に日本全体に認識されてきた。拡大した町をつくるよりも、縮小していくようなまちづくりが評価されるという時代背景がありました。

結局、7年かかりましたが、選挙で反対派だった中の熱心な人を味方にするという強いです。だから、選挙とか政治というのは、まちづくりにかかせないエネルギーになってくる。私は思います。それを上手に使わなければいけません。これは体験から出た考え方です。道路拡幅派の人たちともいろいろ話し合いをして、逆にそういう人たちに言わせる。そうすると、そのエネルギーはものすごく大きくなっていきます。

城下町の道路拡幅をやめて、歩くまちづくりというコンセプトで再生してきました。以前は、城下町の土地を売って郊外に家を建てるといふ人が多かったのですが、道路を拡幅しないで、ここに住み続けようというコンセンサスができたなら、みんなの気持ちが悪化していたのです。「拡幅しなければいけない」と言っていた人たちが、今度は先頭を切って、

まちづくりの議論をしてくれるようになったのです。また、そういう人たちがあちこちのまちづくりを見に行き、朝から晩までまちづくりの話をするようになったのです。こうなったらしめたものです。やはり、市民パワーというのは大きいですね。

●まちづくりの哲学

まちづくりには、市長の哲学が大事だと思います。古い都市の美しい町並みを守っていく論理をつくらなければいけません。それは効率とか、経済性とか、財政力だけで町をつくるうとしてはだめです。違う論理で皆さんと話していかなければいけません。私は、それを歴史軸にしました。

私は市長をやっている、自分の体感でつかんだ感覚があります。それは、町は生き物だという感覚です。良くなる時も、悪くなる時も興亡はあるのです。例えば、町も脳こ

そのよみがえる方向ですが、やはり、それは歴史を縦軸に入れなければいけない。特に、犬山のお城の位置というのは考え抜かれています。山川草木とか、自然の地形にびたりと合ったところにつくってあるのです。昔の統治者はその地形を徹底的に見ています。何日もかけて、山や川、平野といった地形や、地勢というか、風水を徹底的に見てベストのところにお城をつくっているのです。

私の生まれ育った町は、お城が現存し恵まれたかもしれない。人はストーリー性というか、精神性を感

「公」に対する義務もあるわけですから、それをもう少しリーダーは主張していいのではないのでしょうか。それが、「個」と「全体」のあるべき姿だと思います。町並みも、調和の中に個人的な価値観が組み込まれないことには、ばらばらの町になつてしまいます。それが、本来の日本の美しさを失うことになった戦後のまちづくりではないかと思

思いました。

市長在任中にやれませんでした。お堀を復活したかったのです。お堀というのは絵の額縁みたいなもので、絵も額縁がないとだめです。城下町の美も限定しないとだめなのです。城下町をお堀で額縁みたい

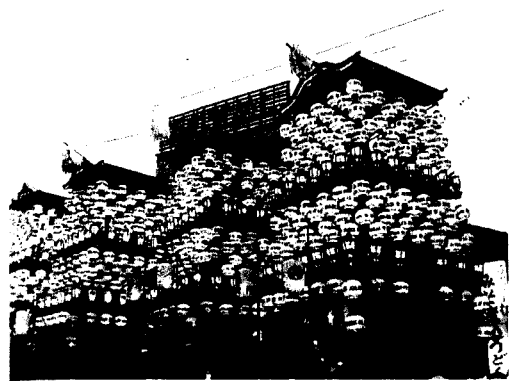
また、中心をつくっていくという精神を持たないと、町は何とも盛り上がりがない、のっぺりとしたものになるのではないかと思います。そういう考えで城下町を再生してきて、まだまだ途中でありますが、人がだんだん戻ってきました。空き家もほとんど埋まり、土日もたくさんの方が来るようになりました。住んでいる人たちも前向きになってきました。

道は公的空間として、そこに住んでいる人に最大の影響を与えるものです。道をどの幅にするかは、人の心理に影響します。もう一つは、景観条例をつくりました。高さ制限も、人に決定的な心理影響を与えます。瓦屋根に補助金を出すとか、色のガイドラインを出すといったことをし

て、城下町の空間を意識的に限定していく方向で来たわけです。

●祭りは最高のソフトウエア

町並みや建物はハードウエアですが、最高のソフトウエアは、その町に伝わるお祭りです。犬山祭りは江戸時代からずっと続いています。犬山は名古屋の尾張徳川の家老の居城だったので、名古屋に似せてつくった町なのです。ですから、名古屋にあったものと同じタイプのお祭りがあります。これは国の重要無形文化財の指定を受けました。私は、この街なかを舞台とした犬山祭り



ったのです。

日南は**鉄肥城**があつて、古い武家屋敷の続いている中心市街地の道路を拡幅したのです。その市長が、みんなの前で「手術は成功したが、まちは死んでしまった」と言ったのです(笑)。これは名文句です。要するに、中心市街地がだんだん寂れてきて、道路を拡幅することが手術だと思つたのです。しかし、手術は成功したけれども、死んでしまった。きれいにしたけれども、ますます寂れてきたという証言なのです。

私は、町はそこに住んでいる住民がどう思うかということ、もう一つ、外からどう思われているかという切り口が非常に大事だと思つてきました。外の人の意見を積極的に自分の町の住民に聞かせることは大事で、行政がそれを仕組まなければだめです。私は、全国町並みゼミの意見を積極的に、政治的配慮で仕組んだのです。それが城下町再生の一つの仕組みになっていったのです。

チルチル・ミチルの「青い鳥」という童話があるでしょう。「あの町はいい」「この町はいい」と住民は

お祭りの保存会の会長をやってきましたし、お祭り気遣いなのです。

昔からのお祭りを熱心にやる人たちがいる町は、伝統が絶対に維持されます。私はお城、城下町、お祭りの3点セットでオンリーワンのまちづくりをやつていこうということ再生をしてきました。

日本の伝統的なお祭りには神仏習合の宇宙観が存在します。犬山の祭りでも、仏教や神話に係る物語のからくりをします。これは神様に對する奉納なのです。ですから、このからくりの前に行くと、何となく頭が下がるような精神性があるので。これが大事なのです。お祭りは子供たちも参加しますが、家の中では親の言うことを聞かない子供たちでも、お祭りのときにはしーんとするのです。これが教えるに教えられない日本の醇風美俗というか、そういうものを体にしみ込ませるように学んでいくのです。これもまちづくりに大事な仕掛けなのです。

町は最高の教科書です。また、総合学習というのが5年くらい前からあります。あれは、小学生や中学生が

「市役所は何をやつています」「市長は何をやつています」「市長は青い鳥みたいなもので、そこに住んだら青い鳥になるに青い鳥があるということを考えるきっかけになりました。——どんな政治家でも、シヨッピング・センターが郊外に来れば、職はできるし、税金は入るし、農家の人は喜ぶし、「麻葉みたいなものだ」とおっしゃいましたよね。でも、それをやつてしまうと、完成した瞬間はみんな喜ぶかも知れないけれども、長期で見ると町がだめになるといふことですね。

石田●市長というのは、どうしても財源と雇用を優先するのです。それには、工場誘致やワンストップ・シヨッピングがまことに手取り早いのです。この間、世界一の自動車メーカーのある豊田市に行きました。あの町は、どうやってお金を使うか悩んでいる町です。ところが、どこへ行っても工場だけでした。効率一辺倒で素晴らしい面もあるのですが、文化というにおいは、申し訳ないです

が町の中を回るので、最高の教育です。ですから、まちづくりに携わっているリーダーたちには、ぜひ子供たちを町の中へ連れて回つてほしいのです。そして、先人たちが自分たちの町をつくるために、どれほど心血を注いだのか。そういう歴史や伝統文化を教えてほしいと思います。

——都市計画道路の話は、お城の下に本町通りという縦に伸びる道があつて、道幅が16mになる予定だったので、道幅を拡幅するか、しないかというの大きな争点だった。それをひっくり返されたわけで、選挙の問題と絡んで、相手方の熱心な支持者をうまく味方につけていかれた。地元で検討会をつくられて議論されたのですよね？

石田●まちづくりの組織をつくつてもらつて、町内ごとにきめ細かく毎晩やつてもらつたのです。この道路の拡幅をやめるといふ具体的なテーマに対して、初めは本当に町内でつかみ合いのけんかぐらい起こるような雰囲気でした。「おれは、市役所を信じて拡幅をやる方向に賛成した

●川を媒体とした交流

また、木曾川を挟んで隣の市長と親友になつたものだから、県は違うのですが、もつと行き来をしようということ、市の職員同士も交流させました。私は流域という概念を重んじ、好きなのですが、特に私どもの場合は木曾川を媒介にして地域のコミュニケーションを強めていくという考え方は大事だと思ひます。

川は有形・無形で、そこに住む人に影響を与えています。ですから、川を媒介にして人々の交流やまちづくりをしていくということで、川にスポットを当てた景観条例をつくりました。

西村●町は最高の教科書。町は生きていて、その中にさまざまな物語があり、その物語はちゃんと先人たちの意図のもとにある。それをきちんと読み取つて、自分たちの今日をつ

のに何だ」とか、そういうディベイトをやつたことがよかつたです。

時間はかかりましたが、まとまりました。結局、やはり皆さんそこに住み続けたかつたのです。考えてみると、道路を拡幅すること自体が住民のコンセンサスを得て決定した方針ではなかつたのです。

——もう一つ、本町通りは犬山祭りの舞台になるわけですよ。ですから、あの道が広がつたり、木戸口というクランクがなくなつたりすると、見所もなくなる。それも大きかつたのではないですか。

石田●そのとおりです。「車山(やま)」を名古屋の50m道路で引いてみましたが、道路が広いと美しさを失います。城下町でぎしぎしと来て、屋根にこつんと突き当たるようなところに、犬山の人は遺伝子で美意識を感じるものですから、道路を拡幅したらお祭りにならないという声も大きかつたのです。

●外の人の意見を聞く

犬山で町並みゼミをやつたときに、宮崎の日南市の市長に来てもら

がちよつとしませんでした。無駄がない。「クリーンではあつてもビュートイフルでない」という表現が当たりますかね。

くつて将来を描いていく。そうすると、そこは必ずや魅力的な町になっていくし、その魅力でいろいろな人が集まってくるようになってくる。

そうすることによって、次の時代はもう少しコンパクトに町を再生する。昔から人間の寸法が変わらないように、町が持っている祭りの寸法や車山の寸法、建物の寸法は人間の生活の寸法から来ているわけですから、変わりようがないのです。

それを人間の歩く目で考えてみると、もう一回取り戻せるのではないか。特に、これから少子高齢化になる中で、そうした人たちのゆつくりと歩く目が大事になってくる。それをベースとして、まちづくりをすることが必要になる。それこそが町の再生であり、魅力的な町をつくることにつながるということです。

犬山が石田市政の12年間でそれだけ変わったということは、やはり政治的な意思でまちが変わることもできるということもあるわけです。

*本記事は「西村幸夫町並み塾」(同実行委員会主催)の協力による